

*JATLaC*

言語文化教育学会  
第17回大会

予稿集

2017年12月2日（土曜日）  
於：早稲田大学 早稲田キャンパス

JATLaC 言語文化教育学会



*JATLaC*

# 言語文化教育学会

## 第 17 回大会

JATLaC

言語文化教育学会  
第17回 大会プログラム

日時： 2017年 12月 2日(土) 10:30-17:40

会場： 早稲田大学 早稲田キャンパス

16号館5階503教室

参加費： 1,000円(当日受付にて 会員・学生証提示の方は無料)

使用言語： 日本語

開会式 : 10:30-10:40

個人発表 : 10:40-12:00

10:40-11:10 萩原 伸一郎 (愛知県立杏和高等学校 他)

「ない」に関する言語表現の分析

11:20-11:50 奥貫 明子 (東京国際大学)

中等教育における英語教育の動機付け

基調講演 : 13:30-14:30

小野 耕世 氏 (日本マンガ学会会長・東京工芸大学)

「日本のマンガと海外のマンガの発展の仕方」

シンポジウム : 15:00-17:30

「マンガは国境を越えるーローカルからグローバルへー」

パネリスト

: 小出 幹雄 氏 (としま南長崎トキワ荘協働プロジェクト協議会)

: 川田 健 氏 (慶應義塾大学)

: 森下 達 氏 (東京成徳大学)

ディスカッサント

: 小野 耕世 氏 (日本マンガ学会会長・東京工芸大学)

コーディネーター

: 中井 基博 氏 (東京国際大学・当学会理事)

閉会式 : 17:30-17:40

## 会長挨拶

本日は「言語文化教育学会」(JATLaC: the Japan Association of Teaching Language and Culture) の第 16 回大会にお越しいただきありがとうございます。最初に少しばかり本学会の紹介を致します。

イスラエルとパレスティナ、アフガニスタンやシリアのニュースを見聞きするにつけ、信条、価値観、世界観を異にする人々の共生がいかに難しいかを実感させられます。だからこそ、本学会は「共生」をモットーに発足しました。つまり、教え、学ぶ言語を問わず、専門を問わず、学生とか社会人とか教師とかの身分を問わず、また民族、宗教、障害の有無を問わない開かれた学会を目指しています。そのため、4つの特徴をもっています。第1は、「横断性」、すなわち、日本語であれ、英語であれ、フランス語であれ、中国語や韓国語であれ、教え、学ぶ言語や文化の違いを超えた学会です。第2は、「学際性」、すなわち、文学、言語学、社会学など、専門領域の違いを超えた人々の集団です。第3は、「職業」の「職」の「職際性」、すなわち、教師、学生、企業人、主婦、退職者など、身分・職業を問わない人々の自由な議論の場です。そして第4に、「異なる」の「異際性」、すなわち、人種、民族、宗教、思想、文化などの違いや障害の有無を超えた研究者の共同体です。本学会も様々な専門の学生、教師、企業人、主婦、外国人などを理事に迎え、運営しています。

学会が専門ごとに細分化され、深化するなかであえてこのような開かれた学会を目指したのは、言語文化教育は分析的であると同時に総合的な性格をもつと考えるからでもあります。そして、言語・文化・教育に関し、コミュニケーションのさまざまな問題を扱ってきました。全体主義と違い、意見の相違は民主主義の根本です。したがって、本学会では、言語文化教育に関心をもつ人々が異なる立場から異なる意見をもちより、自由に議論し、言語文化教育にたいする意識を高めあっています。自然界にしろ、人類にしろ、多様性と変化はすべての基本です。本学会が思想的、構造的に硬直した組織になることなく、多様性を保ちながらつねに変化していくことを目指しています。

本学会は例年6月に定例シンポジウム、11月に年次大会を開催しています。また、機関誌『言語文化教育』を発行しています。

年2回のシンポジウムを開催しておりますが、シンポジウムは本来インタラク션을を旨とします。パネリストの講義を黙って聴くものではありません。そのためにパネリストの発題を短くし、議論の時間をたっぷり取っています。学生、教員、ビジネスマン、主婦と異なる立場から異なる意見を自由に出していただき、議論し、言語文化教育に対する意識を高めていただきたいのです。意見の一致を見る必要はありません。お互いの立場、お互いの考えの違いを認めながら、共有部分を増やしていく。これが本学会が求める共生の理念であります。

この大会への参加を心から歓迎し、また来年の大会でお会いできるようお願いしています。

言語文化教育学会会長 矢野 安剛

# 個人発表

12月2日(土)

午前10時40分～11時50分

# 「ない」に関する言語表現の分析

愛知県立杏和高等学校・尾西高等学校・津島高等学校（定）萩原 伸一郎

## 0.はじめに

日本語で非存在の概念を示すのに「ない」という語が用いられる。物理的な物が特定の場所に存在しないことを示すのが根源的な用法であるが、「熱はない」や「お金がない」といった拡張的に用いられた例がある。物理的な物の有無だけではなく、「まもなく」という形で時に言及する際にも用いられる。慣用表現として対象物を強く好むことを示す際にも「～には目がない」のように「ない」が用いられる場合がある。日本語のメタファー表現に関しては上野 (2002)、瀬戸 (1995)、鍋島 (2011)、松本 (2003)、安井 (2010)、山梨 (2009)などの先行研究が存在する。その他メトニミーやシネクドキが用いられた表現あるいは **Time Is Space** メタファーに関しては **Lakoff& Johnson (1980, 1999)**や巻下、瀬戸 (1997)などで論じられている。「ない」が用いられた表現の中には単にメタファー、メトニミー、シネクドキの例として説明がつきにくいものもあり、複数の観点から分析する必要があると考えられる。そこで本発表では我々人間の認識体系を基盤にしてメタファー、メトニミー、シネクドキなどを通じて非存在の概念を示す日本語の「ない」が用いられた表現が生み出されるメカニズムを検討する。

## 1. 「ない」を用いた拡張用法

### 1.1. 「ない」の定義および分類

「机の上には何もない」や「今日彼は家にいない」のように非存在の概念を表す「ない」は『広辞苑』では次のように記載されている。

- (1) ①人・物・事が存在しない。②もたない。備えていない。「金のー・い人」③留守である。不在である。
- ④すでに死んでこの世にいない

—『広辞苑』

①から④のように異なった定義で複数に分類されているが、ある特定の場所や人のもとに対象物が欠如した状態であることが共通であり、根源的な用法が記載されている。

### 1.2. メトニミーおよびシネクドキ用法の「ない」

「ない」は根源的な用法だけでなく、次の(2)から(4)のように拡張的に用いられた事例が存在する。『広辞苑』に記載されている「金のない」状態も実際には文字通りの意味と異なって用いられることがある。

- (2) 今日は日曜日になので学校はない
- (3) 熱はない
- (4) お金がない

(2)は文字通り教育機関としての学校や校舎が存在しないことを示すのではなく、メトニミー用法として授業が行われないことを表す。(3)は文字通り全く熱がないことを示すのではなく、通常高熱は発症しておらず平熱であることを表すのに用いられる。(4)は文字通り一銭もないことを示すのではなく、金持ちでないことや大金がない状態を表すのに用いるのが通常である。要するに、(3)と(4)は共に上位概念を示す語で下位概念を示すいわゆるシネクドキの用法であると考えられる。

## 2. 「ない」を用いた慣用表現

### 2.1. 「まもなく」について

発話時と参照時の時間的な隔たりが小さいことを示すのに「まもなく」という表現が用いられる。森山 (2002)には類似表現と共に次のような説明がある。

- (5) 母が帰宅して間(ま)もなく父が帰ってきた。
- (6) 母の帰宅に間(ま)を置かず、父が帰ってきた。
- (7) 現実世界において母の帰宅時と父の帰宅時とのあいだには、僅かながらの時間的なずれが想起されるにしても、「間(ま)を置かず」を用いる観察者の認識世界においては、...「時間的間隔が存在しない」、すなわち、連続してその二つの事象が生起すると考えられているのである。

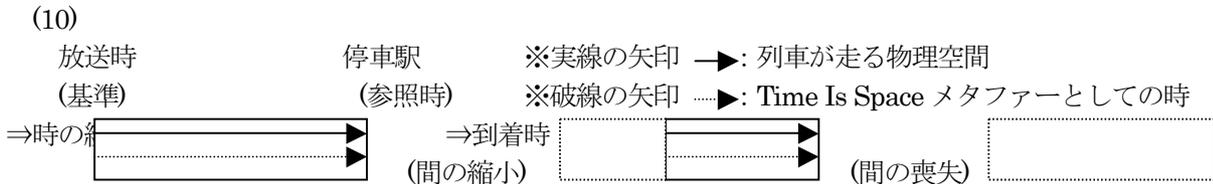
—森山 (2002: 220ff.)

この記述では母の帰宅と父の帰宅という二つの事象の発生を連続的であると考え、実際には存在する短い時間差がないと我々がみなしているとされている。この場合、前述の(3)-(4)のようにメトニミー的に上位概念の「間」で下位概念の時間的な短い隔たりを表すと分析するのも無理がある。また、「まもなく」は次の(8)のように事象がひとつしかない場面でも用いられることから連続性の観点だけでは説明が不十分であると考えられる。

(8)まもなく東京です。

(9)We will soon make a brief stop at Tokyo.

「間」は本来物理的な三次元空間を示す語であり、Time Is Space メタファーとして時に言及する際にも用いられる。(8)の具体的な状況として、停車駅より少し手前で案内放送が流れ列車がまだ走行中であることが想定される。放送時から停車まで列車は物理的空間の中を走行するが、それと並行して時も経過する。停車駅に近づくにつれて残された走行距離および走行時間が短くなり到着時には残りがゼロの状態になる。同じ状況を英語では短い時の経過の概念をもつ'soon'が用いられるが、日本語の「まもなく」を用いた場合文字通り時間的間隔が存在しないと捉えるよりもむしろ発話時を起点に時の経過につれて参照時までの「間」が無くなっていくとみなす方が妥当であると考えられる。図式化すると以下の(10)のようになる。



## 2.2. 「目がない」について

ある特定の対象物に心を奪われて強く好意を抱くことを示す際に(11)のように「～には目がない」という表現を用いることがあるが、洞察力や識別力の欠如を示す(12)とは異なったメカニズムが働いていると考えられる。

(11)彼は甘い物には目がない

(12)見る目がない

目は外界の事象を知覚して判断する役割を担うが、(12)の場合は身体部位としての目ではなく目をもつ洞察力や識別力が欠如している状態を表すと説明できる。一方、(11)の用例は文字通り目が存在しないことを示すのではなく、対象物である甘い物に対する認知能力が欠如している状態を表すものでもない。特定の対象物に極度に魅了されることは別の見方をすればそれ以外の物事に対する思慮や判断力が無くなってしまふことである。要するに、ある一つの対象物に取り付かれてその他の事象に対する認識が喪失してしまうことが視覚行為および認知の源としての目が存在しなくなるというように捉えられると考えられる。

## 3. まとめ

根源的な用法、メトニミーおよびシネクドキ用法、その他慣用表現など「ない」が用いられた表現は数多く存在する。現実には文字通り対象物が存在しないことを表していない場合でも、メトニミー的に隣接関係にある物の欠如、シネクドキ的に包摂関係にある物の欠如など我々の認識体系を分析することにより「ない」が用いられた表現のメカニズムが明確になると考えられる。「ない」が用いられたその他の表現および否定概念の語を用いた表現の分析は今後の研究課題とする。

### 【主要参考文献】

- Lakoff, G. & M. Johnson. (1980) *Metaphors We Live By*. University of Chicago Press. Chicago.
- Lakoff, G. & M. Johnson (1999) *Philosophy in the Flesh: The Embodiment Mind and its Challenge to Western Thought*. Basic Books. New York.
- Langacker, R. (1991) *Foundation of Cognitive Grammar: Descriptive Application*. Stanford University Press. California.
- Talmy, L. (2000) *Toward a Cognitive Semantics* vols.1-2. MIT Press. Cambridge
- 新村出(編) (1998) 『広辞苑』 第五版. 東京.
- 瀬戸賢一 (1995) 『メタファー思考』 講談社. 東京.
- 鍋島弘治朗(2011) 『日本語のメタファー』 くろしお出版. 東京.
- 巻下吉夫、瀬戸賢一 (1997) 『文化と発想とレトリック』 研究者出版. 東京.
- 松本曜(2003) 『認知意味論』 大修館書店. 東京.
- 森山智浩 (2002) 「異言語間にまたがる「間隔」概念の認知メカニズムー間(あいだ/ま)、BETWEENに見る人間の空間認識と知覚体系ー」 上野義和(編) 『認知意味論の諸相 身体性と空間の認識』 松柏社. 東京.
- 安井泉 (2010) 『ことばから文化へー文化がことばの中で息を潜めているー』 開拓社. 東京.
- 山梨正明 (2009) 『認知構文論』 大修館書店. 東京.

中等教育における英語教育の動機付け  
東京国際大学 奥貫 明子

1. この研究の目的

- ・日本の中学校・高等学校における英語学習者の動機の向上・減退について調べる
- ・上記に加え、中学校以前の学校外での英語学習経験と、現在の英語への感情の関係性を併せて調べる
- ・調査を基に、教師や保護者がどのようにさらなる動機付けができるかを考察する

2. 先行研究

- ・動機付けの枠組み

Gardener & Lambert(1972) Attitudes and Motivation in Second-Language Learning.

Bandura, A (1977) Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. Psychological Review.

八島(2002) 「国際的志向性」 と英語学習モチベーション —異文化間コミュニケーションの観点から—

Deci & Ryan (1985) *Intrinsic motivation and self-determination in human behaviour.*

Dörnyei(2009) *The Psychology of the Language Learner Revisited*

- ・動機付け方略

Cheng & Dörnyei (2007) The Use of Motivational Strategies in Language Instruction: The Case of EFL Teaching in Taiwan

Sugita & Takeuchi(2010) What can teachers do to motivate their students? A classroom research on motivational strategy use in the Japanese EFL context

- ・学校での学習における動機付けの変化

山森(2004) 中学校1年生の4月における英語学習に対する意欲はどこまで持続するのか

ベネッセ (2014) 中高生の英語学習に関する実態調査 2014

菊池 (2015) 英語学習動機の減退要因の探求-日本人学習者の調査を中心に

### 3. 研究方法

#### ・対象者・調査時期

対象者：東京国際大学の学生 言語コミュニケーション学部（英語専攻者）50名  
他学部（非英語専攻者）50名

時期：2017年9月～10月

#### ・調査方法

紙面によるアンケート調査

中学校～高等学校の6年間に動機が最も向上・減退した時期

動機向上・減退 それぞれの理由

中学校入学以前の学校外での英語学習の有無について

現在の英語に対する感情・英語検定等の成績

#### ・調査手続き

英語を専攻する＝英語学習への動機付けがある →被験者を、英語専攻者と非英語専攻者のグループに分けて、アンケートを分析

現在の英語の感情を問うQ5については、値の差別化をはかるために、「大好き」から順にポイントをそれぞれ5, 4, 3, 2, 1を与えて計算

動機向上・減退の理由を問うQ9, Q11については、値の差別化をはかるために、最も当てはまる順にポイントをそれぞれ3, 2, 1を与えて計算

動機づけの根本的定義である、方向・強さ・持続性を基に、最も強く動機づけられたグループ、弱く動機づけられたグループを抽出・比較

学習開始時期と現在の感情の関係について分析

### 4. 結果・分析

・Q2 英語専攻→52% 非英語専攻者→48%

・Q12 英語検定などのスコア 受験者→61名 未受験者→38名

受験者のうち B1→52% A2→13% A1→8% B2→7% C2→2%

・Q5 現在の英語への感情（好きか）英語専攻→219ポイント（以下P） 非英語専攻→155P

・Q6 中学校以前・学校外での英語学習経験（あり）英語専攻→56% 非英語専攻→42%

・Q8 最も意欲の上がった時期

・Q9 意欲の上がった理由

・Q10 最も意欲の下がった時期

・Q11 意欲の下がった理由

・最も動機付けされている学習者のグループの意欲の上がった理由・下がった理由

・最も動機付けされていない学習者のグループの意欲の上がった理由・下がった理由

- ・ Q5. q7-1. 学習開始時期と現在の感情の関係

## 5. 考察

- ・ 教師や保護者に出来ること① 動機の安定した学習者を育てるには  
発達段階に適した学習を、早い年齢のうちに体験させる Q5, Q7-1, Q7-2  
試験で高得点を目指すことは、ゴールではなく通過点であると教える Q10, Q11  
教師や保護者自身の海外体験について聞かせる Q11-c  
成長を認め、期待を寄せる Q9, Q911-h, i
- ・ 教師や保護者に出来ること② 動機が向上している学習者には  
学習者同士ではなく、英語話者との会話を実践する機会を与える Q9-b  
他者との比較をやめさせる。自分自身の過去と現在の英語力を比較させ、伸び代を実感させる Q11-j, k, l  
授業でわからないところをすぐに解決する方法を模索させる Q11-g  
やる気のある様子を認めても、学力向上のためのプレッシャーは与えない Q9, Q11-h, i
- ・ 教師や保護者に出来ること③ 動機が減退している学習者には  
教師や保護者自身の海外での体験談を聞かせる Q11-b, c  
メディア媒体などを用いて、英語圏のポップカルチャーなどに親しみを持たせる Q11-b, c  
学習者自身の持つ（4技能のスキルやテストの出題パターンについて）強みと弱みに気付けさせる Q11-e, g  
授業でわからないところをすぐに解決する方法を模索させる Q11-g  
学習は普段から行い、試験のための学習は早めに取り掛かるよう促す Q8-I, o  
成長を認め、期待を寄せる Q9, Q11-h, i

## 6. まとめ

- ・ 中等教育の学習者は・・・（わかったこと）  
自己効力感を感じる時、学習へのやる気が向上する傾向がある。Q9-f, b, g  
高く動機付けられた学習者は国際的・統合的動機を持つ傾向があるのに対し、低く動機付けられた学習者は道具的・外発的動機を持つ傾向がある Q9-b, e, g  
中学校以前の学校外で、早期に英語学習を体験すると、その後の英語への感情にプラスに働く傾向がある Q5, Q7-1  
教師や保護者が、学習者に対して成長への期待を寄せることは有用である。Q9-h, i  
教師や保護者は、学習者の動機向上のために、異文化に触れる機会を与え、

学習の目標を国際的志向の観点で考えさせることができる。Q9-b, e

・本研究の限界・今後の展望

時期の尺度の検討

中学校以前の学校外での学習内容の詳細と感情の関係

高く動機付けられた学習者の家族の英語に対する感情

中学校以前の学習経験がなく、現在英語に良い感情を持つ学習者について

参考文献

Bandura, A (1977) *Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change*.  
Psychological Review.

Deci, E & Ryan, R. M. (1985) *Intrinsic motivation and self-determination in human  
behaviour*. Springer US

Dörnyei, Z. (2001) *Motivational Strategies in the Classroom*. Cambridge Cambridge  
University Press. (米山朝二・関昭典訳 2005『動機付けを高める英語指導スト  
ラテジー35』)

Dörnyei, Z. (2009) *The Psychology of the Language Learner Revisited* Routledge

Gardner, R. G, & Lambert, W. E. (1972). *Attitudes and motivation in second  
language learning*. Rowley, MA: Newbury House.

八島智子(2002) 「国際的志向性」と英語学習モチベーション —異文化間コミュニ  
ケーションの観点から— 『関西大学外国語研究』創刊号

山森光陽(2004) 「中学 1 年生の 4 月における英語学習に対する意欲はどこまで持続す  
るのか」 『教育心理学研究』52,

ベネッセ教育総合研究所 (2014) 「中高生の英語学習に関する実態調査 2014 」  
[http://www.arcle.jp/research/edu\\_english/data/pdf/pdf2.pdf](http://www.arcle.jp/research/edu_english/data/pdf/pdf2.pdf)

## 基調講演

11月26日(土) 午前10時30分～12時

# 小野 耕世 氏

日本マンガ学会会長・東京工芸大学芸術学部漫画学科教授

「日本のマンガと海外のマンガの発展の仕方」

### 講師紹介

小野 耕世 (おの・こうせい)

東京生まれ。

1963年、国際基督教大学人文学科卒業。映画マンガ評論家。東京工芸大学芸術学科漫画学科教授。日本マンガ学会会長。

著書に「アジアのマンガ」(大修館書店・1991)、「アメリカン・コミックス大全」(晶文社・2005)、「世界コミックスの想像力」(青土社・2011)、「長編マンガの先駆者達—田河水泡から手塚治虫まで」(岩波書店・2017)ほか。

### 講演要旨

世界のストーリー・マンガは、おおざっぱに言えば、アメリカ合衆国、日本を中心とするアジア諸国、フランス・ベルギー・イタリアなどを中心とするヨーロッパ諸国を中心として発展してきた。(もちろん、ラテン・アメリカやアフリカにもマンガはありますし、中東でも日本のマンガは人気がありますが)マンガ家のありかた、読者層、発表形態などにも興味深い違いがある。そうしたマンガ界の様相を作品を示しながら紹介してみたい。

シンポジウム

15：00-17：30

「マンガは国境を越える  
：ローカルからグローバルへ」

パネリスト

：小出 幹雄 氏 （としま南長崎トキワ荘協働プロジェクト協議会）

「マンガ・アニメによる地方活性化

:豊島区・南長崎マンガランド事業」

：川田 健 氏 （慶應義塾大学）

「外国（台湾）における日本マンガの受容」

：森下 達 氏 （東京成徳大学）

「少年マンガは社会問題をいかに扱ったか」

ディスカッサント

：小野 耕世 氏 （日本マンガ学会会長・東京工芸大学）

コーディネーター

：中井 基博 氏 （東京国際大学・当学会理事）

## パネリスト紹介

小出 幹雄（こいで・みきお）

1958年 トキワ荘のあった豊島区南長崎生まれ。

1992年から家業の時計店・スエヒロ堂を継承し、商店会や町内会の地域活動に参加。

2008年よりトキワ荘記念碑設置実行委員会、トキワ荘通り協働プロジェクトの事務局長を歴任。

現在、(本業の傍ら)、としま南長崎トキワ荘協働プロジェクト協議会の広報担当、NPO日本マンガ・アニメトキワ荘フォーラム理事。

川田 健（かわだ・たける）

1995年3月 早稲田大学大学院文学研究科修士課程修了 修士（文学）

1996年4月 慶應義塾大学総合政策学部非常勤講師

1998年3月 早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学

2002年4月 愛知文教大学国際文化学部専任講師

2014年4月 愛知文教大学人文学部教授

2016年3月 愛知文教大学を退職

現在 慶応大学総合政策学部・早稲田大学教育学部・東洋大学文学部非常勤講師

森下 達（もりした・ひろし）

東京成徳大学人文学部日本伝統文化学科 助教

1986年、奈良県生まれ。京都大学大学院文学研究科博士課程修了。博士（文学）。

専門はポピュラー・カルチャー研究。主要業績に、『怪獣から読む戦後ポピュラー・カルチャー 特撮映画・SFジャンル形成史』（青弓社）、『『地帝国の怪人』（1948年）の物語構造—戦前・戦中期の児童文化との連続性と画期性—』（『マンガ研究』23号）などがある。

「台湾における日本 ACGN 文化受容研究序説-総体としての文化受容について」

慶應義塾大学総合政策学部非常勤講師 川田 健

本報告では、台湾における日本 ACGN (Anime Comic Game Novel の略、中華圏で用いられている、日本のマンガ・アニメ及びそれに派生する商品や文化を総称する語) に関する学術研究、及び台湾最大の同人誌即売会 fancy frontier (以下 FF) の母体である雑誌『Frontier』をの紹介を通じて、台湾における日本 ACGN 文化受容の一端を述べることを目的としている。発表者は一貫して台湾の研究者・批評家の言論及を資料としながらこの問題を考察している。それは、当該分野に関わる研究者、評論家の多くは自身も日本 ACGN 文化の愛好者であることが多く、これらの著述を読み解くことは、単に当該分野の学術動向を理解するのみならず、受容者の意識を解明する上でも大きく裨益すると考えるからである。本発表で主に取り上げるのは、国立東海大学等で博士号を取得し、逢甲大学等で教鞭を執る陳仲偉氏の議論である。氏の所論のうち今回は上記の主により以下の3項目について報告したいと思う。

1：90年代末における台湾漫画の状況

2：「文化帝国主義」的視点に対する反論

3：雑誌『Frontier』刊行の経緯、基本方針の紹介

1では、「編印連環図画輔導弁法」いわゆる「漫画審査制度」の解除、経済の国際化にともなう新著作権法の制定が台湾漫画界に与えた影響についての上記陳仲偉氏の見解を紹介する。2では、日本マンガ・アニメを一種の文化帝国主義とする論調に対する陳氏の反論を通じて、日本 ACGN 文化の本質についての研究者の見方を紹介する。3では、陳氏も多くのコラムを掲載する同誌の基本方針を通じて、台湾の目指す ACGN 文化について私見を述べたいと思う。

陳氏の捉えた日本 ACGN 文化の本質は「ファンが主体的に参加する文化」である。そしてこの視点で見れば、90年代から00年代の台湾の漫画受容者の活動は、創作、評論、学術のフィールドで主体的に参加する「ファン文化の勃興・発展」の時期と捉えることができる。こうした台湾における諸活動は「文化が越境すること」の意味について、一つの視点を与えてくれるものと発表者は考えている。

## 少年マンガは社会問題をいかに扱ったか

——1970年代の『少年マガジン』における転換——

森下 達（東京成徳大学人文学部日本伝統文化学科 助教）

現在、人気を博しているマンガ・アニメは、「政治」や「社会」からは切り離されたものとしてキャラクターを中心に受容される傾向が強くなり、作り手もそのことを見越して作品制作を行っている。しかし、かつては、少年向けのマンガ作品であっても、社会を見据えたテーマ性がそこにこめられることがしばしばであった。そうした傾向は、どのようにして転換を見たのか。1970年代半ばの『少年マガジン』を舞台に、石ノ森章太郎や永井豪、梶原一騎といった作家の営為を俎上に載せながら考えてみたい。具体的には、同時代の日本で広く社会問題化していたロッキード事件を、彼らが自作の中でどのように扱っていたのかということが分析の対象となる。

## 言語文化教育学会設立趣意書

大学における言語教育は、言語学や文学などの専門家の手に委ねられている場合が多い。言語教育そのものを直接の専門とはしない人々が教育の効果をあげるために工夫を重ね、努力してきた。その経験を言語教育の専門家も交えて分かち合い、相互啓発の場を設けたい。同時に、今後言語教育に携わる者への研修を兼ねることで、教員養成改革へ一石を投じることも目的とし、言語文化教育学会（以下、本学会）を設立する。

言語教育は分析的であると同時に総合的な性格をもつ。したがって、学問分野がより専門化し、細分化と深化による分岐が進む時代に、本学会は言語教育という共通の基盤に立ち、教える言語の差異を超えて、異なる分野の専門家に討論と相互啓発の場を提供する。

本学会は、学際的であるだけでなく、「職際的」な性格をもつ開かれた学会を志向する。したがって、言語教育に携わっている人の他に、学習者や社会人も含め、言語教育に関心のあるすべての人に参加を呼びかける。

本学会は、講演会や討論会を開催することによって、専門や立場を異にする参加者が自由に言語教育の諸相を論じ、言語教育への認識を深めることを主な活動とする。内容としては、言語教育における言語と文化の関係を中心に、言語と心理、言語と社会、言語とコミュニケーション、言語と情報などを論じる。

本学会の前身である「早稲田大学言語教育研究会」は1996年より、言語の違いを越えた言語教育者間の知識の共有を目的として、国内外の研究者による講演会を企画・運営してきた。同研究会はその理念を引き継ぐ本学会の設立とともに、発展的に解消する。

### 《学会理事》

一森 俊明	(東京大学学生：フランス語・言語学)
浮田 三郎	(広島大学： ギリシャ語・言語学)
岡田 浩平	(早稲田大学名誉教授： ドイツ語・ドイツ文学)
河住 有希子	(日本工業大学：日本語・日本語教育)
佐藤 巨呂呂	(大学書林国際語学センター)
志野 文乃	(早稲田大学大学院生：英語・英語教育)
Snowden, Paul	(多摩大学： 英語・比較言語学)
中井 基博	(東京国際大学：英語・英語教育)
中野 美知子	(早稲田大学名誉教授：英語・英語教育)
生井 健一	(早稲田大学： 英語・言語学)
深田 嘉昭	(静岡大学： 日本語・言語教育) 事務局
福田 育弘	(早稲田大学： フランス語・フランス文学)
藤村 泰司	(国際大学： 日本語・日本語学)
村上 公一	(早稲田大学： 中国語・中国語教育学)
村田 久美子	(早稲田大学： 英語・異文化コミュニケーション)
本橋 幸康	(埼玉大学： 日本語・国語教育)
矢野 安剛	(早稲田大学名誉教授： 英語・応用言語学)

〈アイウエオ順〉

# 言語文化教育学会(the Japan Association of Teaching Language and Culture) 会則

## 第1条：(名称)

本会の名称は言語文化教育学会(JATLaC: The Japan Association of Teaching Language and Culture)とする。以下、本会と記す。

## 第2条：(目的)

本会は、わが国における言語文化教育の発展と向上に資するための調査・研究を目的とする。

## 第3条：(事業)

本会は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

1. 大会、その他研究集会の開催
2. ニュースレターおよび学会誌の発行、ホームページの運営
3. その他本会の目的を達成するための事業

## 第4条：(会員)

本会の会員は年齢、職業、身分、性別の一切を問わず、第2条の目的に関心をもつ者で構成され、正会員、学生会員、賛助会員からなる。

1. 正会員：
2. 学生会員：
3. 賛助会員：

## 第5条：(会費・会計)

会員は会費を納入するものとする。会費の額は理事会が提案し、会員総会において審議、決定する。

会計年度は毎年4月1日から翌年3月31日までとする。

予算案および収支決算書は、会計監査担当の理事が監査し、総会で承認を得る。

## 第6条：(役員)

本会に会長1名、理事を若干名置く。

1. 理事は会員より選出されるものとする。任期は3年とし、再任を妨げない。
2. 会長は理事の互選により選出され、会務を統括し、本会を代表する。

## 第7条：(総会・理事会)

本会に総会、理事会を置く。

総会は、正会員、学生会員をもって組織し、原則として年1回、会長が招集する。総会は、本会の議決機関として本会の事業および運営に関する重要事項を審議決定する。また、理事会は必要に応じて臨時総会を開催することができる。

理事会は、会長および理事をもって組織し、第3条に定める事業ならびに収支予算および収支決算に責任を負い、執行の任に当たる。

## 第8条：(事務局)

本会は、事務局を早稲田大学内に置く。

## 第9条：(改正)

会則は、総会出席者の3分の2以上の同意を得て改正することができる。

付則：この会則は、2001年10月27日の本会第1回大会の総会において制定し、その日より発効する。

## 言語文化教育学会入会案内

本学会は言語教育に携わっている方だけでなく、社会人や学習者など、言語教育に関心を持つすべての人に参加を呼びかけております。したがって、本学会には、本学会の趣旨に賛同なさる方でしたら、どなたでも入会いただけます。

入会を御希望の方は、入会申込書、会員登録用紙に必要事項を御記入のうえお出しください。なお、本学会の連絡は、原則として電子メールでいたしますので、メールアドレスの御記入をお忘れなく。また、会費は、原則として学会の口座へ振り込んでいただきます（申し訳ありませんが、手数料は個人負担とさせていただきます）。

入会申込書・会員登録用紙は学会ホームページよりダウンロードしていただけます。

〔会費〕            正会員   ： 5000 円

                      学生会員： 3000 円

                      賛助会員： 20000 円

《学会預金口座》：三菱東京 UFJ 銀行 江戸川橋支店

                      普通預金 1017574 言語文化教育学会

提出先住所：       〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-6-1

早稲田大学教育・総合科学学術院 福田育弘研究室内 言語文化教育学会事務局

- ・ 入会申込書の提出、会費納入の際には、確認が遅くなることがございますので、前もって必ず事務局宛メールでご一報ください。（事務局に係が常駐しているわけではありません）
- ・ 入会は入会申込用紙、会員登録用紙の提出、および会費の納入をもって完了するものといたします。確認ができ次第、事務局より手続き完了のご連絡をメールでいたします。
- ・ 振り込みの明細書をもって、領収書とさせていただきますが、学会発行の領収書が必要な方は事務局までお申し出ください。
- ・ 学生会員の入会申込、更新にあたっては、学生証のコピーなど学生であることが確認できる書類を提出していただきます。学籍を確認できない場合は、正会員扱いとなりますので、ご了承ください。

問い合わせ先：言語文化教育学会事務局 (jatlac@gol.com)

## 〔お知らせ〕

- 言語文化教育学会、2018 年度、春期・秋期大会に関しましては、当学会ホームページでご確認ください。
- 2018 年度の秋季大会個人発表に関しましては、大会ホームページをご確認ください。会員の皆様には実施要領決定次第メールにてご連絡いたします。

- 『言語文化教育』通巻第13号論文募集のお知らせ

以下の要領で、学会誌第13号の論文を公募致します。多数の方のご応募をお待ち致しております。

- ・論文を応募する者は、言語文化教育学会の会員であること。
- ・論文の内容は、言語教育に関するものであること。
- ・未発表のものに限る。
- ・論文執筆の為の使用言語は、原則として日本語・英語とする。
- ・論文の体裁は以下のように統一すること。
  - 長さ：資料・参考文献を含めて15枚以下
  - 体裁：A4、四方の余白を20mmに設定。マイクロソフトワードのファイル、および、pdf.ファイルで提出
- ・締め切り：2018年9月末

学会は、提出された論文に関して審査し、2018 年 11 月中に応募者に採否を連絡する。

- ・当学会に対するご意見、ご要望等は、学会事務局宛 E-mail でお知らせください。
- ・学会企画に関するお問い合わせも、事務局まで、E-mail にてお願いいたします。

**言語文化教育学会事務局**

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-6-1

早稲田大学教育・総合科学学術院 福田育弘研究室内

E-mail : [jatlac@gol.com](mailto:jatlac@gol.com)

ホームページ : <http://www.waseda.jp/assoc-JATLaC/>

言語文化教育学会  
第 17 回大会予稿集  
2017 年 12 月 2 日

**JATLaC 言語文化教育学会**

大会参加費領収